

# 審議会での協働に関する主な意見等

各部会の第 1 回での配布資料「これまでの審議会での主な意見等の再整理」から抜粋

## 1 これからの時代環境

情報化が進み、区民のコミュニケーション手段が高度化・多様化する。  
地域の課題は地域で解決しようとする、区民の地域社会への参加意欲が高まる。

## 2 分野別意見

### (1) まちづくり・産業・環境

今後も、定住型の住宅都市という杉並区の特性は変わらない。その中で、10年後を見据え、地域の特徴をもっと活かしたまちづくりが必要。それによりコミュニティや地域の絆が強化できるはず。高円寺では、「座・高円寺」ができたことで、地域と商店街の新たなつながりができ、交流が進んでいる。今後も、このようなつながりと交流による地域の活性化を進めるべきである。高齢化の問題といっても、いろいろあると思う。実際に東日本大震災でも亡くなっているのはほとんどが高齢者(災害弱者)であり、地域がいざというときに助け合う社会の構築が必要である。

### (2) 保健・福祉・医療

障害者自身、そして介護者の高齢化が進む中で、相互かつ全体で助け合う地域社会をつくっていく必要がある。  
医療にしても介護にしても、これからは、専門施設の充実を図るだけでなく、話し相手のボランティアなどの支え合いの仕組みが求められる。

### (3) 教育・子育て・文化

働く母親が地域の中で不安なく生活できるように、相互に話し合う場を設けるなどのサポートできるシステムができるとよい。  
10年後に、今の子どもたちが、自ら考え積極的に地域に参加するような、自主性のある区民となるよう育てていくことが重要。

### (4) 行財政運営・協働

高齢化の進展等の中で、様々な課題を抱えている方を区全体できちんと支えていくためには、余裕のある人がそれなりのチャリティーをする必要があるのではないかと。  
これからの時代は、協働の地域社会づくりがより重要なテーマとなる。また、時代の変化を踏まえて、区の役割を明確化することも必要。  
協働の地域社会づくりに参加意欲のある区民が多い中で、これをどうコーディネートし、「新しい公共」を築いていくのかが大きな課題となる。  
ボランティア活動等を通じて、世代を超えた支え合いを助け、地域全体の活性化を図る必要がある。区民との協働を進めるためには、区民の地域への愛着や、自ら暮らすまちのことであれば協力するといった気持を活かしていくようにすべき。  
今後も、定住型の住宅都市という杉並区の特性は変わらない。その中で、10年後を見据え、地域の特徴をもっと活かしたまちづくりが必要。それによりコミュニティや地域の絆が強化できるはず。(2 - (1) - 再掲)  
「協働」の概念が、何か新しいものを始めるような受け止め方が多いと思う。なぜ協働が必要なのか、改めて明らかにする必要がある。



# 各部会における「協働」に関する主な意見

## 【第1部会】

### 1 まちづくり

劇場や文化施設、それに付随してショッピングができるように重層化して魅力的な拠点づくりを進めれば、若い人たちを惹きつけることができる。

### 2 産業

高円寺では、「座・高円寺」と地域・商店街・大学等とが様々なイベントを連携して行うことにより、まちの活性化・人々の交流が深まってきている。

「座・高円寺」の開設を契機に地域の交流促進とまちの活性化が図られた成功体験を、他の地域でも活かしていくとよい。

農業については、生産消費を全て区内で行うのではなく、例えば南相馬など、地方との連携も必要である。

### 3 環境

各自治体間やそれぞれの主体間の連携が重要である。

### 4 防災

防災対策については、今回の東日本大震災を踏まえて課題の整理等が必要である。

密集市街地の防災機能を考えたとき、建物の不燃化と道路の拡幅、ポケットパーク(空地)の整備を進める一方、コミュニティの力をいかに高めるかという視点が重要である。

防災・防犯には、人と人とのつながりや地域のコミュニティ力、共助を高めることが必要。一方で、町会に加入していない人が多い中で、防災訓練等への参加率の低さや地域での情報伝達機能が弱いなどの課題がある。

### 5 防犯

空き巣の発生件数が多いことは、区のブランド力に影響する。これに対応して区民生活の安全・安心を確保するためには、地域コミュニティの充実・強化、見通しの良い道路の整備などを進めることが必要である。

### 6 その他

自治体間連携や民民・地域間の協働・連携についても、各部会に共通したテーマとして議論を深めるべき。

## 【第2部会】

### 1 健康

今後は、どうやって健康に対する人々の意識(自分の健康を守っていくかというモチベーション)を高めていくということが重要である。行政は、健康づくりにつながる区民の活動を支援するという基本的なスタンスになるのではないか。

多くの区民に参加してもらうためには、区民のいろいろな活動と行政の取組がタイアップできるとよい。

健康な人生とか頑張る人生といった言い方ではなく、楽しい人生を送るという視点で考えるとよい。そうした中で、医療の続きとしてではなく、自分自身が楽しく、あるいは仲間と一緒に動くことで自分自身も活発に活動するようになり、仲間を助けていけるという、参加型の新しい形の地域社会ができればよい。

#### 「健康」のまとめとして

人を助けることを楽しみながら、自分の健康をつくっていきけるような社会づくりと、そのための区の支援(健康づくりをする区民の活動や取組へのバックアップ～情報、機会、便益の用意等～)を進めていく。

医療連携や、医療・看護・介護の連携により、地域の中で安心して療養ができるような仕組みづくりを区として支援していく。

### 2 参加

年齢や障害の有無等に関わらず、家庭や地域社会の中で、支え、支えられるという関係になっていくことが広い意味での参加と言えるのではないか。これを地域社会の中でどのように実現していくのかがポイント。

参加することにより、社会の中で自分の役割を持ち、それによってモチベーションを高めて自立につながっていくことが大事。

参加することにより、お互いを認め、役割を認め合うことで、自らの楽しみにつながるというように、楽しむことが参加の基本とも言える。

「自助」「公助」「共助」の観点で考えると、「公助」だけで参加にかかわる事柄すべてをカバーするのは難しい。

参加を考える3つの側面、「場所」、「手法」、「主体」を考えたとき、「場所」は充実してきており、「主体」についてもNPO活動等が広がっている。一方で、「手法」について、多くの区民の参加を促す上で、いかにアクセスしやすい情報が発信されているかという情報提供面での課題がある。

行政の役割は、「場所」「手法」「主体」を確立するとともに、事業の意味についてわかりやすく伝えることである。

こういう能力を持つ人にはこういう活躍の場がある、こういう障害を持つ方にはこのような社会貢献ができるなどについて、行政が出来る限り具体的な情報提供等を行うなど、区民の参加の後押しができるとうい。

情報は、行政だけが伝えるのではなく、NPOなど地域の団体を活用することで効果的に伝わる。

杉並区は地域貢献活動など、区民の活動が非常に活発である。引き続き推進していくとともに、どこが弱いのか、どこにメリハリを入れたらいいかを詰めていき、行政は後押ししていく。

その人の能力や状況等に応じて地域社会に参加する、区民参加型の杉並区をつくっていくために、行政として何をしたらよいか。杉並区はいかにして区民が全面的に参加する自治体をつくっていくのか。

### 3 生活支援

在宅介護は家族だけの介護ではない。イギリスでは一般のボランティアも加わっており、在宅支援のあり方を根本的に改める必要がある。

共助として「地域の人がどこまで介入できるか、どこまで担えるか」という点は難しい。ヘルパーならいいが、近所の人にやってもらうのはいや、ということもあり、都会において地域の支え合いを全面的に期待することには無理がある。

「共助」で地域の人助けるということも大事だが、すぐそばで、周りが理解しているということも伝えることも大切である。

情報は、受け手側の意識がないと伝わらない。関係者が地図を作るなど情報提供の主体となることで、地域の物知り屋さんが増え、地域全体の情報認知が高まる。そのような参加の仕組みを入れ込む。

支援が必要な人には、媒介をしてくれる人が必要である。都会では近隣者が媒介者となることは難しいが、同じ境遇の人ならば媒介者となりえるので、ここに情報を流すことでその情報が広がっていく。

プロシューマー、ピアカウンセラーなど、高齢者、障害者、介護者など自らも参加していく、という地域社会をつくっていく。

#### 「生活支援」のまとめとして

入院、老健、ケア付き住宅などの施設、在宅を支える通所・訪問サービスなどが、うまく動いていくシステムを整備していく。

区が発信し周知するというだけではなく、人・地域の団体を介した情報提供という、情報の流れをつくっていく。同じ境遇の人々が参加するネットワークに情報提供し、そこから情報が広がる、という参加型の情報獲得型社会を築いていく。

## 【第3部会】

### 地域の子育て力・教育力・文化力の創造とつながり

地域の中で必要とする人に、子育てに関する学習や情報を得られることができるようにするとともに、顔を見合わせて相談できる身近な場があることが大事である。今後の子育て支援は、預かり施設を中心とした施策よりも、子育て・子育てをきっかけにして新たなネットワークを築き、その人材を育て情報を提供していくことが必要である。

子育て経験のある元気な高齢者はボランティア意欲もあり、身近な地域にいる大きな子を育て

た現役世代が頼りになるので、こういう人たちを地域の子育て力に活かす視点が大事である。そうした活動を通じて、高齢者が子育て中の若い人たちから学ぶこともある。

教育に関しては、子どもが地域のいろいろな方々の中で囲まれながら成長していくことが必要である。地域の中で企業がボランティア活動を推進することで、企業にも利益があり、また、子どもにも学ぶことが多くあり、区と企業が提携して地域の中で様々な人と学び合うことが大事である。

高齢者には、知識や経験が豊富な方がたくさんいるので、例えば小学校や中学校などで話をしたり、反対に子どもたちが老人ホームなどに行ってボランティアをする機会を得るなど、地域の交流をもっと盛んにすることが必要である。

今の子どもたちには、先生・親のタテ関係と、友達とのヨコの関係しかなく、ナナメの関係というものがない。ナナメの関係を多く体験することにより、いろいろな価値観があることに気づくと思うが、そのためには、地域の方の力による世代間交流というのがすごく大事である。

学校支援本部は、うまくいっているところとそうでないところと両方ある。全校の学校支援本部がうまく運営できるように、素人集団に任せるだけではなく、サポートする仕組みを強化することにより、かなりの課題が改善できる。

地域の人材を学校支援本部単位で見つける仕組みではなく、人材ネットワークのような仕組みを区が持ち、支援本部がそこから必要な人材情報を得ることにより、どこの学校の子どもたちも、平等な体験ができるようになる。

生きる力・考える力・行動する力、社会力や人と共存していくことなど、子どもたちが自然に学ぶ場を設ける必要があり、例えば「放課後子ども教室」は有効な取組の一つである。

大人塾を受講した退職間際の方や地域の中に存在する様々な知識・経験等を持つ区民がいるが、そういう人材を循環させるようにしなければもったいないので、学校を核にした仕組みが必要である。

地域の人が大人塾で学んだりしたことが、自分の楽しみや自己実現だけではなく、子どもたちに教える喜び・伝える喜びを大事にしたい。また、子どもたちも、いろいろな大人を見ながら育っていく。先生だけが大人ではなく、いろいろな大人がいることを学校でも子どもが理解していくことが大事である。

発達障害に認められないグレーゾーンの子どもに対するサポートがまだできていないと感じている。それをいかにサポートしていくかという点で、児童館などで勉強の進みが遅い子に対するサポート体制を築き、高齢者の方々にボランティアをしてもらうなど、地域全体で成長していく視点が必要である。

杉並の各地域には潜在的な様々なポテンシャルがある。今後は、新しいことを始めることだけでなく、眠っている地域の力の発掘・発見、育成・創造、継承・発信する観点が重要である。

これからの公共と文化の関係は、現場で地域と行政と専門家が協働していくような体制をつくらないといけない。

協働という発想は、行政にクレームを言うことではなく、地域住民も専門家も一緒になってやるということ。別な言い方をすれば、自分たちも責任を持つということで、文句を言う主体から責任を共有するようになっていく。協働という言葉は、そういう意味でかなり深い意味がある。

今後は、従来の地域や「民」のイメージから脱却し、都市部における地域とは何かを問い直し新たな関係を築いていかなければ、新たな課題への対応が図れないのではないかと。